

## 研究ノート

# Plowsharesプログラム(米国3大学による協働型平和学プログラム)に関する調査研究

片岡 徹 萱野 智 篤

## 目次

1. 研究の目的
2. 各大学の平和学プログラムの特色
3. 3大学による協働プログラムPlowsharesの到達点と課題
4. 今後の展望・本学の平和学プログラムへの示唆

## 要旨

米国インディアナ州にある3大学(ゴーシェン大学, アーラム大学, マンチェスター大学)は, それぞれがユニークな平和学プログラムを有していることで知られている。ゴーシェン大学はメノナイト派で, アーラム大学はクエーカー(フレンズ教会)で, マンチェスター大学がプレズレン派であり, キリスト教の中でも歴史的平和教会(peace church)として知られる三派である。その3大学が平和学プログラムの相乗効果を高めるためにと, 2002年に同じくインディアナ州にあるリリー財団(Lilly Endowment)より1388万ドルに及ぶ基金を得て3大学協働プログラムPlowsharesを作り上げた。

本研究では各大学の平和学プログラムを概観した後, 3大学協働プログラムPlowsharesの到達点と課題を明らかにして, 本学の平和学プログラムの一層の充実に向けた示唆を得ることを目的とする。

## 1. 研究の目的

米国インディアナ州にある3大学(ゴーシェン大学/Goshen College, アーラム大学/Earlham College, マンチェスター大学/Manchester University)は, それぞれがユニークな平和学プログラムを有していることで知られている。ゴーシェン大学はメノナイト派で, アーラム大学はクエーカー(フレンズ教会)で, マンチェスター大学がプレズレン派であり, キリスト教の中でも「歴史的平和教会(peace church)」として知られる三派は, いずれも第2次世界大戦後の間もない時期に平和学プログラムを学内に設けて

いる。特に北星学園大学の姉妹校でもあるManchester Universityは1948年に平和学で学士号を出すなど, 米国で初めて平和学をカリキュラム化したことで知られ, その後世界の平和学プログラムのモデルとなった。

その3大学が平和学プログラムの相乗効果を高めるために, 同じくインディアナ州にあるリリー財団(Lilly Endowment)から1388万ドルに及ぶ基金を得て, 2002年より平和学担当者による学術的交流だけではなく, 学生同士も交流出来る仕組みである3大学協働プログラムPlowsharesを作り上げた<sup>注1</sup>。

ただ, このPlowsharesプログラムは現在では終了していることから, 本研究では各大

---

キーワード: 平和学プログラム, ゴーシェン大学, アーラム大学, マンチェスター大学

学の平和学プログラムを概観した後、3大学協働プログラムPlowsharesの到達点と課題を明らかにして、本学の平和学プログラムの一層の充実に向けた示唆を得ることを目的としたい。

## 2. 各大学の平和学プログラムの特色

### (1) ゴーシェン大学 (Goshen College)

ゴーシェン大学の「平和・正義・紛争学 (peace, justice, and conflict studies)」では必修科目として、

- 平和に関する聖書の課題 (Biblical Themes of Peace)
- 3年次専門演習 (Junior Seminar)
- 調停, プロセス, スキルと理論 (Mediation: Process, Skills and Theory)
- インターンシップ (Internship)
- 4年次専門演習 (Senior Seminar)

がある。また、

- 暴力と非暴力 (Violence & Nonviolence)
  - 紛争と暴力を転換する (Transforming Conflict & Violence)
  - 宗教, 紛争そして平和 (Religion, Conflict & Peace)
  - 修復的正義 (Restorative Justice)
  - 和解のダイナミズム/神学 (Dynamics/Theology of Reconciliation)
  - 個人の暴力と癒し (Personal Violence & Healing)
  - 社会変革のためのデザイン (Designing for Social Change)
  - 現代世界における戦争と平和 (War & Peace in the Modern World)
  - 紛争に調和した集団作り (Conflict-Healthy Groups)
- より6科目を選択する。そして、

- ミクロ経済学の原理 (Principles of Microeconomics)
- 戦争と平和の経済学 (Economics of War & Peace)

より1科目を選択し、そして

- 政治学入門 (Introduction to Political Science)
- 公共政策入門 (Introduction to Public Policy)
- 国際政治学 (International Politics)

より1科目を選択する。また、

- 世界史におけるジェンダー (Gender in World History)
- 民族紛争の歴史 (History of Ethnic Conflict)
- 解放の神学 (Liberation Theologies)
- 現代の女性問題 (Contemporary Women's Issues)
- 人種, 階級そして民族関係 (Race, Class & Ethnic Relations)

より1科目を選択する。なお、本専攻に関連する領域として、

- 平和と正義学 (Peace and Justice Studies)
- 紛争転換学 (Conflict Transformation Studies)
- 聖書と宗教 (Bible and Religion)
- 再洗礼派メノナイト学 (Anabaptist-Mennonite Studies)
- 歴史と社会研究 (History and Social Research)
- 歴史学 (History)
- 国際学 (International Studies)
- 哲学 (Philosophy)

- 神学とキリスト教の牧師  
(Theological Studies and Christian Ministries)
- 女性・ジェンダー学  
(Women's and Gender Studies)
- 法曹準備学 (Pre-Law)
- 政治学 (Political Studies)
- 社会政策 (Social Policy)
- 心理学 (Psychology)

がある。

これらに加えて、ゴーシェン大学には1968年から開始された通称SSTと呼ばれる「奉仕プログラムを通して学ぶ学期 (Study-Service Term Program)」が設けられており、現時点で7700人以上の学生が世界24カ国で学び、その割合は全学生の80パーセントにも上っている。

全体としては宗教に重きを置いたカリキュラムとなっている。なお、ゴーシェン大学はかつて北星学園大学ともBCA (Brethren College Abroad)」プログラムを通して姉妹校提携をしていた時代があった。

## (2) アーラム大学 (Earlham College)

アーラム大学の「平和・グローバル学 (Peace and Global Studies)」では必修科目として、

- 経済学入門 (Introduction to Economics)
- 国際関係論入門  
(Introduction to International Relations)
- 外交入門 (Introduction to Diplomacy)

から2科目を、そして他の必修科目として

- グローバルな力学と世界平和  
(Global Dynamics and World Peace)
- インターンシップ (Internship)
- 研究方法 (4年次)  
(Senior Research Methods)

- 集大成となる経験 (4年次)  
(Senior Capstone Experience)」

がある。それらに加えて、下記の4つのコース (Four Areas of Concentration) があり、各コースの中から最低限3科目を履修する必要がある。なお、掲載されていない科目については個別にコース・ディレクターと相談の上で認められる場合がある。

### 1) 宗教的絶対平和主義 (Religious Pacifism)

- 刑事裁判と道徳観  
(Criminal Justice and Moral Vision)
- 紛争解決 (Conflict Resolution)
- 戦争と暴力に対する宗教的呼応  
(Religious Responses to War and Violence)

を選択する。

### 2) 法律と正義 (Law & Justice)

- 紛争解決 (Conflict Resolution)
- 国際関係の理論  
(Theories of International Relations)
- 国際法：主権、国際人権法と人権  
(International Law: Sovereignty, Humanitarian Law and Human Rights)
- 国際法：環境と開発  
(International Law: Environment and Development)

から3科目を選択する。

### 3) 実践 (Praxis)

- マルクス主義 (Marxism)
- 紛争解決 (Conflict Resolution)
- 都市の政治経済  
(Urban Political Economy)

- 1825年までのラテンアメリカ  
(Latin America to 1825)
- 1825年以降のラテンアメリカ  
(Latin America Since 1825)
- 平和創造の方法  
(Methods of Peacemaking)

から 3 科目を選択する。

4) 「第四世代」の平和学  
(“Fourth Generation” Peace Studies)

- マルクス主義 (Marxism)
- ポストコロニアル理論  
(Postcolonial Theory)
- 現代の社会思想  
(Contemporary Social Thought)
- 社会科学の哲学  
(Philosophy of Social Science)
- 国際関係の理論  
(Theories of International Relations)
- 平和創造の方法  
(Methods of Peacemaking)

から 3 科目を選択する。

全体としては国際関係論に重きを置いたカリキュラムとなっている。なお、アールム大学には「日本語・日本語学 (Japanese Language & Linguistics)」と「Japanese Studies (日本研究)」があり、日本では早稲田大学と姉妹校提携をしている。

(3) マンチェスター大学  
(Manchester University)

マンチェスター大学の「平和学 (peace studies)」では必修科目として、

- 平和学概論  
(Introduction to Peace Studies)

- 平和と正義に関する現代的課題  
(Current Issues in Peace and Justice)
- 調停と和解  
(Mediation and Reconciliation)
- 非暴力に関する文献  
(Literature on Nonviolence)
- 平和学実習 (Practicum in Peace Studies)
- 紛争解決 (Conflict Resolution)
- 戦争と平和の分析  
(Analysis of War and Peace)
- 平和の諸課題 (Peace Issues)
- 平和と紛争学に関するインターンシップ  
(Internship in Peace and Conflict Studies)
- 特定課題研究 (Special Problems)
- 平和学専門演習  
(Seminar in Peace Studies)

を置いている。それらに加えて、

1) 国際・グローバル学に関する科目を中心にした履修  
(Concentration in international and global studies)

2) 「対人間・集団間の紛争／対立を中心にした履修  
(Concentration in interpersonal / intergroup conflict)

3) 「宗教学・哲学科目を中心にした履修  
(Concentration in religious and philosophical bases)

4) 「社会的不平等に関する科目を中心にした履修  
(Concentration in social inequality studies)

5) 「個々でデザインする履修。ただしディレクターと事前に相談し、平和学プログラムの会議で承認される必要がある (Individualized

concentration)」

という5つのコースがあり、各コースの中で指定された科目を履修することになる。

### 3. 3大学による協働プログラム Plowsharesの到達点と課題

前述した通り、3大学協働プログラムPlowsharesは、以上のようにそれぞれ独自の平和学プログラムを展開した。3大学の学生・教員を含めた教育・研究プログラムとして2002年に開始し、そして2013年に終了した。次に本プログラムの到達点と課題について検討していくことにする。

まず到達点としては、各大学が配分された予算を活用して各々の平和学プログラムを高度化することが可能となった点がある。例えばゴーシェン大学では、「Journal of Religion, Conflict and Peace（宗教、紛争と平和に関する紀要）」というオンライン・ジャーナルを立ち上げ、Plowsharesプログラム終了後も現在まで更新されている<sup>註2</sup>。また、州都インディアナポリスに「平和の家（Peace House）」を使って学生間の交流を促進しようとした点も特筆すべきである。

ただ、この「平和の家」については当初よりその活用の仕方や稼働率について問題点も指摘されてきた<sup>註3</sup>。その背景として米国は日本と比較にならない程の広大な面積を有しており、例えば夏休みの期間に活用するといっても大学によっては移動に時間がかかることは想像に難くない。

実はこの「平和の家」の活用に限らず、著者が聞き取り調査のために各大学を訪問した感触でも、この3大学による協働プログラムが以下の理由により当初より困難性を包含していたことが明らかになった。

まず第一に、意思疎通の困難性（物理的要因ならびに心理的要因）が挙げられる。前述したように、同じ平和学プログラムでも各大

学によって力点が異なり、そしてそのプログラムが創立された背景も異なっている。そして、3大学はそれぞれ教育熱心なことで高い評価を得ているリベラル・アーツの大学であり、各大学の担当教員が多忙を極めていたことも意思疎通の困難性に拍車をかけた要因の一つとなった。よって前述したようにゴーシェン大学の紀要のように学内で新しいプロジェクトを立ち上げ、その成果を3大学間でウェブ上で「共有」することが出来たとしても、実際に面と向かって話しをする場所を設定することは難しかったのである。

そして次に強調すべき点として、歴史的平和教会（peace church）とひとくくりには出来ないという歴史的文脈が挙げられる。日本において平和学に関する文献では、この三つの派を一つのくくりとして説明する傾向があるが、実際には独立した動きとして捉えることが適切であることが明らかとなった。それは各々が排他的になっているという消極的な意味合いでは決してなく、むしろ各々の派が歴史の中で培ってきた平和に対する姿勢や信条の元に各々の平和学プログラムが発展してきた経緯があることが大きい。ただし、この見解はこの3大学において見られた知見であり、他地域や他国においては異なる傾向を示すケースがあるのかもしれない。しかし、各大学平和学プログラムの担当者（代表者）同士が、今回著者が訪問することが契機となり、初めて同席したことが象徴しているように、リリー財団の構想や予算の規模に比して、3大学が交流を深める前提条件が備わっていなかった点は、仮に別の形でこのような協働プログラムを進める場合の大きな教訓となろう。

### 4. 今後の展望・本学の 平和学プログラムへの示唆

以上見てきたように、Plowsharesプログ

ラムについて検討してきたが、そこから本学平和学プログラムの今後の展望について三点にわたり述べていきたい。

まず第一に、他大学と連携をする場合、それを支える教職協働を基盤とした職員体制が不可欠だという点である。米国に比べて、物理的な距離という点では難しさが軽減されるが、規模の大小を問わず継続性という観点からは安定的な体制が何より求められる。そしてそれは体制の問題に留まらず、学内の理解や支援も必要である。つまり、担当者のみが協働に関わるならば、担当者が交代した際には継続が困難になることも予想されるのである。

第二に、協働する大学は物理的な距離というよりは教学理念や歴史的に関係の深い大学間の連携のほうがスムーズに進む可能性がある点である。例えば、恵泉女学園大学は現在の北星学園女子中学高等学校の前身、スミス女学校の卒業生である河合道が創立者であり北星学園大学とは非常に親しい関係にある。その恵泉女学園大学は大学院に平和学研究科を置き、平和学修士号を取得することが可能な仕組みを有している。現在は個々の研究者同士で交流があるが、前述したように学内の正式な手続きを経て合意に至るならば、良い協働関係を築ける可能性を秘めている。

そして最後に、当然と言えば当然だが、不断の努力を持って既存の科目である平和学(現在は平和学Ⅰ、平和学Ⅱの二科目)のカリキュラムを見直し、更に魅力的なものにしていくことである。足場を固めることなしに連携を図ることは、他大学との連携も形式的なものに終始してしまうことに陥る可能性がある。

現在では、学部学科を問わず本学の平和学受講者から海外の大学院で平和学、紛争解決、開発学等の領域で進学する卒業生が増えてきている。本論文で紹介した3大学の特徴は、とりもなおさず学部教育を大切にしているこ

とであり、とりわけ担当教員が非常に熱心に学生との関わりを持ち、日々の教育実践に関わっていることである。

以上の3点は、今後、本学の平和学プログラムが他大学の平和学プログラムとの協働を行う際に、その成果をゆたかなものとするために必要な前提条件と考えられる。

\*本研究は、2013年度北星学園大学特別研究費「Plowsharesプログラム(米国3大学による協働型平和学プログラム)に関する調査研究」(研究代表者:片岡徹文学部心理・応用コミュニケーション学科准教授 研究分担者:萱野智篤経済学部経済学科教授)による研究の成果である。この研究の一環として3大学の先生方に直接インタビューをさせて頂く機会を頂いた。ここに謝意を表したい。

#### 〔注〕

注1 本プログラムの概要については、片岡2013bを参照。ただし、同論文で紹介しているPlowsharesのウェブサイトはプログラム終了とともに削除され、現在は閲覧が出来ない。

注2 この紀要の立ち上げの経緯については、LIECHTY2007を参照。

注3 これについては、DEAGOSTINOが2006年9月18日に地元のSouth Bend Tribune紙に寄稿した「“Low enrollment stalls Peace House - Goshen, Earlham and Manchester colleges still optimistic (平和の家、低い稼働率。ゴーシェン大学、アールラム大学、マンチェスター大学はそれでも楽観視している)”」という記事を参照。

#### 〔参考文献・ウェブサイト〕

〈全体に関わるものとして〉

- 片岡徹(2011)「(翻訳)マンチェスター大学の平和学プログラムの歴史:過去、現在そして未来(ケネス・ブラウンマンチェスター大学名誉教授、元平和学研究所所長)」北星学園大学文学部北星論集 第48号第2巻 pp.103-117
- 片岡徹(2013a)「(翻訳)学生が将来平和を作り出すためのリーダーシップを発揮するために、

プレズレン派の大学がなすべきこととは（米国マンチェスター大学教授 グラディス・E・ミュアー）」北星学園大学文学部北星論集 第50巻pp95-109

片岡徹（2013b）「3大学協働の平和学プログラム“Plowshares”（アールラム大学、ゴーシェン大学、マンチェスター大学）の紹介」北星学園大学文学部北星論集 第51巻第1号pp59-62

LIECHTY, Joseph., 2007, *The Genesis of Journal of Religion, Conflict and Peace*, Journal of Religion, Conflict and Peace, Volume 1. Issue 1, Fall 2007.

<http://www.religionconflictpeace.org/editor/genesis-journal-religion-conflict-and-peace>（最終アクセス日：2014年11月3日）

〈3大学について〉

○アールラム大学（Earlham College）

「平和・グローバル学（Peace and Global Studies）」  
<http://www.earlham.edu/peace-and-global-studies/>

（最終アクセス日：2014年11月3日）

*Earlham College to Strengthen Peace Programs With Sharing of \$13.88 Million Lilly Endowment Grant. College News, Earlham College, May 22, 2002.*

<http://collegenews.org/news/2002/earlham-college-to-strengthen-peace-programs-with-sharing-of-13-88-million-lilly-endowment-grant.html>

（最終アクセス日：2014年11月3日）

○ゴーシェン大学（Goshen College）

「平和・正義・紛争学専攻（Peace, Justice and Conflict Studies Major）」

<http://www.goshen.edu/academics/peace-justice-and-conflict-studies/>

（最終アクセス日：2014年11月3日）

「平和・正義学副専攻（Peace and Justice Studies Minor）」

<http://www.goshen.edu/academics/peace-and-justice-studies/>

（最終アクセス日：2014年11月3日）

「紛争転換学副専攻（Conflict Transformation Studies Minor）」

<http://www.goshen.edu/academics/conflict-transformation-studies/>

（最終アクセス日：2014年11月3日）

「奉仕を通して学ぶ学期（Study-Service Term）」

<http://www.goshen.edu/sst/>

（最終アクセス日：2014年11月3日）

*Goshen College professor edits new ‘Journal of Religion, Conflict, and Peace,’ which launches online scholarly discussion of role of religion in peace, Goshen College, November 6, 2007.*

<http://www.goshen.edu/news/pressarchive/11-06-07-peace-journal.html>

（最終アクセス日：2014年11月3日）

○マンチェスター大学（Manchester University）  
「マンチェスター大学平和学研究所並びに紛争解決プログラム（Manchester University Peace Studies Institute and Program in Conflict Resolution）」

[http://www.manchester.edu/academics/departments/Peace\\_Studies/index.shtml](http://www.manchester.edu/academics/departments/Peace_Studies/index.shtml)

（最終アクセス日：2014年11月3日）

*Journal of Religion, Conflict, and Peace launches online scholarly discussion of role of religion in peace, Manchester College News Archives, Manchester University.*

<http://www.manchester.edu/news/PeaceJournal.htm>

（最終アクセス日：2014年11月3日）

○リリー財団（Lilly Endowment Inc.）

<http://www.lillyendowment.org/>

（最終アクセス日：2014年11月3日）

*Executive Message, Annual Reports, Lilly Endowment, 2002.*

<http://www.lillyendowment.org/annualreports/2002ExecMessage.pdf>

（最終アクセス日：2014年11月3日）

（関連する新聞記事）

*“Low enrollment stalls Peace House – Goshen, Earlham and Manchester colleges still optimistic”, DEAGOSTINO, Martin., Tribune Staff Writer, South bend Tribune, September 18, 2006.*

[http://articles.southbendtribune.com/2006-09-18/news/26965155\\_1\\_new-students-fall-semester-fewer-students](http://articles.southbendtribune.com/2006-09-18/news/26965155_1_new-students-fall-semester-fewer-students)

（最終アクセス日：2014年11月3日）

